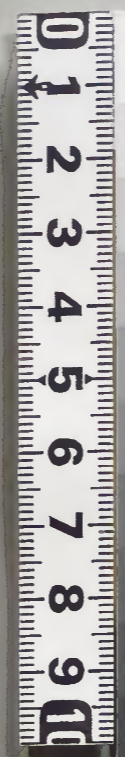


寛永諸家譜

藤原氏乙二冊之内一
良門流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186(85)		
函號	特	76	1







上杉

加、凡

宅間

相法宗

矢部

中山

寛永諸家系図傳

友原氏

乙一水家

良門流

上杉

大藏冠嫡男
漢海云

不比等

右大臣

正二位

贈左大臣

正一位

兵杖とく海ら

氏北長者

淺草文庫

房前ふさへ

中衛大納言ちゆうゑのだいなごん 冬藏ふゆぞう 正三位しょうざん

贈右政大臣さきだてのむねあきら 正一位しょういち

小家おけ 此こゝ 乃の ちりちり ちりちり 乃の 弟あに 小こ 家け 小こ 家け

ちりちり 乃の 弟あに 小こ 家け と号なづ せ

真楮まこと

大納言だいなごん 正二位しょうじ 本名ほんな 八束やつか

内磨うちまろ

右大臣うゑだいじん 氏うぢ の長者ちやうぢや

平城へいぜい 天智てんぢ 此こゝ 二代にだい 右大臣うゑだいじん

贈右政大臣さきだてのむねあきら 従一位じゆいち 長男ちやうなん 大臣だいじん と号なづ せ

冬嗣ふゆたつ

天智てんぢ 天皇てんかう 此こゝ 沙さ 字じ 右大臣うゑだいじん

淳和じゆんわ の御宇のみう 小こ 左さ 大臣だいじん 乃の 右う 大臣だいじん 正三位しょうざん

贈太政大臣 正一位
文德天皇此御祖父
天長三年又薨御 閑院の大臣と号す

良門

内舍人 正六位上

高友

内大臣 正三位

勸修寺此御祖なりこれより下めて
勸修寺と号す
醍醐天皇此御父の内大臣

定方

勸修寺 右大臣 正二位
左大臣 三条と号す
醍醐朱雀の二代右大臣

物もの於を

左ひだり承り知ち督とく 從よ七しち位ゐ上じやう

為な輔ほ

授たづな中ちゆう納なつ之の從じゆう二に位ゐ耳みみ露ろ方はうと号ごうと

説せつ孝こう

播は磨ま守しゆ 正せい四し位ゐ下げ

於を明めい

右みぎ大だい弁べん 奏そう議ぎ

憲けん補ほ

久く内ない々々 正せい七しち位ゐ下げ

威い實じつ

依よ部ぶ々々 中ちゆう文ぶん亮りやう 正せい七しち位ゐ下げ

景憲

皇台文亮
正五位下
九少年

威憲

武部連
正五位下

清房

武部守
正五位下

重房

幕紋竹乃丸
飛雀二

新重

少秋大膳大夫
法名性高
取安門院飛人
友中北条圖
皇太子

門院 義人 少 氏

くどめく 冥 東 一 行 氏

憲 房

秋 名 と 号 氏 上 秋 兵 庫 氏

上 西 門 院 義 人 友 本 系 圖 一 水 赤

門 院 義 人 少 氏

京 都 日 系 河 尔 舍 我 乃 少 氏 討 死

法 名 道 諱 官 本 系 圖 一 道 勳 少 氏

道 号 昌 漢 院 号 果 院

憲 房

氏 部 大 捕 冥 東 北 策 氏

康 永 二 年 上 列 臣 列 の 守 護 一 氏

應 安 元 年 九 月 十 九 日 是 利 陣 北 討

卒 日 未 詳 六 十 三 法 名 道 昌 道 号 松 山

寺 号 國 清

越 後 の 赤 七 二 男 憲 賢 一 氏 少 氏

憲方

山内安房守

りては右京亮

康暦元年四月晦日管領とあり

之れより之憲影が弟憲友が息男の房

と国東あふ松と管領なり

應永元年十月廿四日卒と宋三子

法名道合 后号天樹 院号明月

憲定

山内安房守

りては右京亮

應永十二年八月十七日管領とあり

同十九年十二月十日卒と宋三十八

法名長基 道号大令 与号先照

憲基

安房守

りては右京亮

應永廿九年二月六日發願とあり

同日二十六年正月甲寅年とあり廿七

法名心元 道号海中 院号宗徳

憲實

安房守

憲基之孫とあり

實之憲基が伯父氏初大補房方が子なり

應永廿六年正月管領とあり

法名長棟 道号高岩

憲忠

右京亮

永享三年十二月廿七日御念ふとあり

生家一此とあり

大鈞 院号具運

房歌

共給が捕 實は憲忠の中なり
氏列六十子陣よとひく卒と兼
三十二法名及純 道号清岳 院号
大光

房歌

四郎

房歌これとや一なりとみは實々
房歌が一族越後北守護相持守房定

か子あり

應仁元年後飯とあり

越後北國長森ありなりとあり討死

年六十七 法名可淳 道号若峯

寺号海龍

憲房

大郎

歌定あきまことこれとや—かひと子ととて六

房むら歌うたが中なかつ因よ晟あきが子こなり

永正十二年えいせいじふにねん—あき後ご領りやうととなり

大永六年おほえいごねん上野こうづのの國くに高たかとと房むら平へい升のぼり

陣ぢんににををひひとと卒そつとと兼かね平へい九く 法はふ石しつ

道憲みちのり 石号いしごう大成たいせい院号いんごう珍洞ちんどう

憲寛

大郎

憲房のりこれとや—なすすひひとと子こととはは寛かん房むら

因いん東北とうほく涉せつ取と源げん高たか基もと此こ子こなり 法はふ名な

得月とくげつ 道号みちごう石号いしごう

憲政

徳とく仁に卒そつ志しととののちち景けい勝しょう山さん系けい三さん郎らう也や

家督をわくふにこれとき三郎右衛門
領憲政が鉅り楮券を此ゆ小憲政
せしむく越後の國よりとせしむ生官と
しむに天正七年三月十日なり

輝虎

彈正少弼 法名 護信 權大僧都 法皇
不識院 号と
實々 桓成 号と 立代 信守 府内 軍卒

良文六代長尾次郎景弘が亂佐徳吉
為系が子なり憲政上松北称号ありび
後領職とゆふ
永祿二年三月輝虎憲政が家督と
法皇酒倉八幡より一をひく後領
天正六年三月十三日逝去年号十九

景徳

越後守

源正少將

輝虎

やーしむく子とて実の尾

越前守政系の子輝虎が姪なり

天正七年輝虎が家督をうつ

同十六年五月廿三日正位下り叙

正位下り叙

文祿三年正月廿日後三位下叙

宰相

同十月廿日橘中納言小任下清原家

源正少將

元和九年三月廿日逝去歳六十九

法名宗心院号覚上

定勝

源正少將

元和九年二月十三日従五位下り叙

これ侍従子細也

同年五月十六日

右徳院殿小湯ナリ一キくリつリ景勝が家

督とつぎ并ニ礼ヒ

寛永三年八月十九日コエニ景勝が家

信也

幕政重席シが下リりルこと

慶長十九年チ揚列大坂志直野合ノ戦の

と義景勝が家人軍切あはれり

翌年

東照大権現御威状をいふるもの三人

これ

今度お揚列大坂志直野表防

戦に別表粉骨神妙に働

此に仕合威思食下や

寛永二十年
正月十七日

松原常陸守

えど ちり ねがら ーぎ の おしよごう
と度お振列大坂志直野表防
我々刻 画粉背补妙々細紙
家祇高名感思命下や

癸亥二十年

正月十日

次田大炊守

今度お振列大坂志直野表防
我々刻入精々感思命下や
と濃達々々感思命下や

癸亥二十年

正月十日

鉄孫丸

許領為元

一 吳服

一 重

一 黄全 こうぜん

拾枝

松魚常陸舟

一 吳眼

一章

一 沙腰物 しあの

一 腰

次田大炊師

一 吳眼

一章

洪孫丸舟

已上

加爪かづめ

●
朝定あさぢょう
高直十六代たかねぢうじろだい

上杉弾正少弼うへすぎたけのしやうじ

顯定あきぢょう

式部大輔しきぶのしやうぶ

扇名あふぎのな

伊豫守いよのまもり

法名希歌ほふなまのきか

氏定

源正少弼

朝顯

中務少輔

八条と号と

法名明新

滿朝

八条 修理亮

滿定

共庫物 右京 中務大輔

政定

修理亮

今川範政内縁あるふりゆへに政定を

や一子とて養ひて此の父

滿定小幼とてこれより養ひてある年

し中後引くしりく居しと扱を
あつため加ふ瓜と号し

忠定

右京亮

遠江山名北庄新池々と飲初と

政泰

右京亮

明應六年と川上郎氏親新池郷と飲
知と人き此寺をさつとい悔りしり
とあり

泰定

右京亮 敬八

天文三年と川氏輝と新池郷を
飲知と人き乃寺をさつと
同六年と川嘉元新池郷を飲と

魚をこれ半をあげて

同十年新地郷の領知よをいへ
好婿此所人ありといへども相違
なく領知よをこれ状を承えられを
さづ

政豊

後赤子 童名子増 法名松月
政を十歳のころより父泰定に長久保に

をいへ粉骨をつりて紙をかり
おとせ給領知此事おせあり候
らざるの自天文十六年義えり
政豊小書を承へ

永禄十一年

東照大指現を列沙出陣乃水より
沙逆水して是列の境小堀し
りり修を國中よ入じと事候
たまふ

政尚

集人正 從六位下 備後守
若年 守

大権現につくたくまら

天正十二年尾列長久手合戦此とき
敵を討捕

大権現相列奥列九列教度此陣
供事 法祿小沙傍らくり

法りと法

慶長元年城列依んくまら卒
法名宗漢

保忠

忠と忠 生國武勇

大権現此鉤命小つくお祖又改豊が
娘子とつるからゆつ了保忠初く瓜を
りつと稱号とも実名眼初源云

保次が子なり保次が父を源光兼保成
なり保成が父を源光兼保成といづれも
大指現よりつたてり保成の三方衆
我場になむと闘死し保成を尾列
蟹江の城より討たむ

忠澄

氏部少輔

慶長七年氏部江戶北御城より

右徳院殿首服よりたまり御諱此
字よりつたり甚しき忠澄と号に

同六年

右徳院殿字於文より本官詔と

清上洛此より佐をせり大坂より

いづれより

大指現よりつたてり保成の三方衆

いづれより

同十九年大坂陣の時より使者

光明ありて毎日陣中をめぐり見る
元和元年八月七日大坂合戦此とき
涉使として

白河院殿此涉前々信一合戦此等
策信の首を奪ととをさしびて徳軍
先手此人殺を配へされり一命小
うわく流矢に相討ぐもさく合戦
しりあつたのとき忠澄敵をつきあせ
ま首と下りよとつじ

同年十二月従五位下と叙一氏被加揚
一信と

寛永十七年涉使として一肥前
長崎よりあり英國よりあり
ん此邪徒殺十人と斬罪して其
船を焼一つじ

寛永十八年八月十六日一卒
法名宗黒

忠澄

甲斐守 生國後河

將軍家よりつとむる

寛永八年 従六位下之叙 甲斐守

一 伝

同十年 湯小姓 従六位下之叙

同十六年 上之 従六位下之叙

あつとめ 蕃 従六位下之叙

信澄

守右衛門 生國氏列

寛永八年

將軍家より湯小姓 従六位下之叙

同十六年 湯書院 蕃 従六位下之叙

定澄

木下之 生國氏列

寛永十一年

將軍家より湯ユ

同十六年 湯ユ 院イ 番バン 家カ 致チ

家カ 致チ 竹タケ 丸マル 舞マヒ 崔サイ

良門より十三代
重房

宅間

重房以前此祖上松系松系圖小松系
かるがゆりしこれこれを略す

勅使しんし 一ノめく上松上松水号水号

修理大夫 左束左束手手

新重

上松大膳大夫 水安門院為人
關東小下向と 文成乃達者為人
法名性為

憲房

松若小し号以 丹波上松 長庫以
上西門院為人

京都河原北合我々との付丸
法名道鉄 道号若籍 与号瑞光

憲殿

氏部大輔 元々安房守
關東北管領
康安二年上列 皇列越列木の書後
中

應安元年九月十九日 是利陣了

とひく卒と年六十三 法名道昌
道号極山寺号國清
國清寺と建立と

憲藤

中務少輔

建武三年三月十八日渡部

とひく討死と一筆

物房

弾正少將

關東北後領長初少輔往憲と友策

領と少

信列 信列乃守護とら 法名常春

道号得元

物宗

釈迦堂 中務少輔

應永二年正月後飯と形

鶴尾北也幸川と形

同廿二年八月廿六日結列也柄山と

をひく遊去 法名 禪也 道号

相瀧 寺号 德泉

氏憲

右形つ依

鶴尾也幸川

應永十年九月三日小後飯と形

同二十年正月十日吉下別南坊

満隆持伴小志と形

同日付り 討死 法名 禪秀 号

日山

氏物

丸馬物 早世

京形 一 つふ

氏歌

仲理亮

憲方

伊豫守

應永二十四年正月十日

をひく討死

憲春

大郎

憲基公 頼子 高下とをひく討死

持憲

中務少輔

京都

快守

大納言 法下 鶴見北別当

氏憲とをひく討死

禪 欽亮

氏憲とをひく討死

憲將

兵庫氏

貞治五年六月廿六日

僧可

前建長久庵和尙 佛印大光禪師

如也

應永六年正月廿六日

六十八年

憲賢

越後次郎 子世

能憲

宅間六郎少輔

園東北後領伴臣守重能

子

報忠方と建立一應安元年十月

十五日

永和元年七月十七日小石寺 法名
道諱 道号致裳

憲盛

伊豫守 上校が系圖少安房守憲方と稱す
康暦元年七月晦日後領と稱す
應永元年十月廿四日一死
六十歳法名道合 道号永樹
院号明月

憲春

刑部大輔 一死を稱す
関東北後領と稱す
康暦元年七月七日一死
法名道珠

憲英

飛人大夫
奥列の後領と稱す

憲宗

萬見 丸を拾登

京都よりつふ

とどめは物房親麿か杉子なり

越列の守後松山より相續止海

より憲方杉子より下迄總を

格ぐる候より道世と

道号大を道久唐白 将神店

如三梅寺

應永二十九年十月二十六日

伊豆大見よりとひく寂を

めは七十二歳

房方

氏部大史

とどめは物房か杉子なり

越列此守後憲宗か杉子なる

実は安房守憲方か息なり

越列此為後

應永廿八年十一月十日死
又十日某 法名道越 道号大法

物方

高倉 左馬助

應永廿九年十月十四日京死
子ひく死 法名道堅
后号密棟 保真院

頼方

七郎

永享四年二月死

清方

十郎

兵庫

憲實

憲基が 子管領と
法名長棟

重方しげふ

三郎

叔子しゅし 道世だうせい 法名ほうな 道悦だうえつ

来

六郎

来

十郎

憲光けんこう

廳どうのま 貞まこと 左馬助さまのすけ

奥おく 列りゅう 北きた 後ご 飲いん 水みづ 法名ほふな 道盛だうせい

道号だうごう 光山こうざん

憲國けんこく

只懸ただか 兵庫助へいこすけ

憲輔けんぽ

只懸ただか 六郎

憲長 けんちやう

秀人三郎 松岩と号す

憲茂 けんしやう

六郎 越岩と号す

憲信 けんしん

六郎 右馬助 法名性次 巽剛
と号す

憲親 けんしん

七郎

房憲 ふやうけん

三郎 右馬助

憲孝 けんこう

宅間兵庫助

共初少輔 能憲が孫子なり

明德三年九月廿六日 死す 女六歳

房方

氏部大補

憲業が親子より及ぶ

憲定

山内 安房守 中法右衛門

應永十二年八月十七日小笠原領より

同十九年十二月十日より

三十八歳 法名長基 道号大念

寺号先照 先照寺を建てる

憲重

山内 左京亮 越後守小僧

憲基

山内 安房守

應永二十年二月六日 叡領より

鶴見惣持より

同二十六年正月四日 死年廿七歳

法名修元 道号海平 院号宗海

義憲

同二十六年宗徳院と建云々

依竹丸と物 右京大夫

右馬頭義憲 やーちひく子と

道徳と相續とあり 依竹丸

号と

憲實

山内 安房守 雲洞庵と号に

憲基やーちひく子とに実と

民部大輔房方が息あり

應永二十六年正月小叟飲職と

号と

寛正七年三月六日因防とひて

号と 法名長棟 道号高岩

憲忠

山内 右京亮

僧

周岱

亨德三年十二月二十七日德念

とひく討死法名長鈞院号大韶

院号大韶

僧

法亭

僧

房歌

山内 法名道純 道号清岳

院号大光

歌定

山内

房歌や一子少子

父之房歌が一族なり

寛正七年二月十二日子陣小

をひくわと

重影 一ゲチキ

上松修理大史
伏見院為人

重友 ミトモ

大茂権少輔

物定 モノサズ

彈正少將

高師直と友友飲あり

信列沙原陣よりをひく付死

三十三歳 法名道禪

重行 イゲチキ

左少将監

建武三年三月十日青渡色河へ

をひく憲友と相ありと友十七歳

より志く付死

物定

伴後守 ひとしむら 武部大夫定友
物定やーなひく子とん実友
友成が子なり
應安三年 建徳寺を建ふ
同八年四月二万より死す 法名希願
院号靈岩

物野

八条 中務大輔 法名明新

満物

八条 條理亮 童名珍博丸

満定

九条 中務大輔 兵庫次

房藤

掃部卿

氏定

麻呂 彈正少弼

歌定が頼子実之頼歌が子なり

氏定は頼子なり

應永二十三年十月の白坂

をひく切腹を法衣常継 道号

仙巖 院号普恩

持定

扇谷 治部少輔

氏定は頼子なり

定頼

三郎

高運

持備正法下 一位大僧都

鶴見別当

実氏武敏左輔物廣が子

持朝

扇首三郎 童名竹考丸

野房

三郎

和成

永嘉門院院人

千秋と号す

友成

友明

長合

某

長合 共庫助

氏為北國司

氏春

長合 共庫物

應永二十四年正月十日

満隆持仲

氏憲

新影

小山田 大内大輔 法名道松 道号

吉原

定重

小山田 修理亮 法名聖機 道号

青山

定教

小山田 三郎

女

涉加、カ、ル、ツ、コ 爲 サリ 憲房カキ 於子ユウ

重能 キチ

上杉 伊豆守 イツノミ

兵庫以憲房ヒロコノミ 於子ユウ 實ト 爲 ト 勅修ト 寺ト 文

津入道ツノミ 於子コ 引付ヒキ 一番ヒト 此コノ 以ト 人

皇列クワン の守ノミ 護ゴ

建武二年八月ケンブニニヤシツ 執忠シツ 寺ト 也ナリ 建ケン 立リ 之ノ 正マシ

貞和六年十二月廿一日シネワニシツニニヤヒツ 越前エチノ 于コ 也ナリ

自ト 官クニ 也ナリ 法名ホウナ 道宏ミチヒロ 乃ナリ 号ナリ 秀峯ヒデミネ

寺号テラナ 執忠シツ

重忠 シゲタカ

宅間ウチマ 此コノ 元祖ゲンソ 左京亮サキヤウリョウ 修理亮シウリリョウ

憲房ケンボウ やヤ 一ヒト 乃ナリ 於コ 子コ 也ナリ

建武二年ケンブニニヤ 執國シツクニ 寺ト 也ナリ 建ケン 立リ 之ノ 正マシ

隱者インシャ 也ナリ

能後

宅間 左衛門 依 引付一番北人

應永八年十月晦日

法名道高 道号妙山 執國寺檀檀

憲清

掃部 助 三峯寺 越列小僧

氏房 國司

憲重

助之郎 援下掃部

憲家

掃部 助

憲元

物二郎 長教少輔

越列三峯寺

憲貞

大京屯

漢語を將トく陸奥守

了

許之身竹 鶴北越を以

永享十年十一月金澤を以て

自害

憲重

揚部卿

淡路守

持成

小太師

資永守とて自害

憲重

四郎 伊豆守

奥列り法ふ

應永三十年五月十日自害

法名通得 石号資山

憲俊

讚岐守

正長元年五月廿二日死

法名后嘉道号悦堂

憲能

讚岐守

憲時

左衛門佐

統兼

長

貞清

正壽

物重ものしげ

讚岐守さぬきのり

定憲さだけん

兵部少輔ひやうぶのすけ 法名永三ほうにん

統元すたもと

定朝さだとも

掃部すわぶ 物もの

顯重あきしげ

十郎じゅうらう 法名宗剛そうこう 道号吟憲ぎんけん
院号貞叟しんそう

宗國むねくに

修理しゆり 法名見云けんぐん 道号徳茂とくしげ

院号書光

憲方

三十郎法名 胤云 院号書山

院号書樂

相列山内此店よりと云く 栗園山
徳翁寺と建立之也

房成

兵庫物

永禄七年高卷よりと云く 村元
法名高順 道号目室 寺号長雲

憲總

又十郎

目録

九清門伝

父房成と一所より討死 法名常見

院号玉寶

規箇

治部大輔

小糸氏連とつゝ

規次

二節

檀形
元和七年正月十日百小死年六十三歳
法名源廓 通号頂養
氏列都築郡二俣川村峯鶴山三佛寺

忠次

仔細

天正十九年十一月一日

東照大権現よりつくとくまうりぬ小姓と名

慶長八年因原陣此修をまつとむ

同年十二月左文字の涉腰物を修修と

同六年

大権現此嚴命をうけとけり新山此城小

とむし此増田左兼右村が家成或矢を

没収の沙汰とつとむ

同七年春日明神齋院と法建立此とき

領をけり物りく涉賣物とむりてと事と

法とむ涉賣美の功をも此日まゝ賣

物と木とむ

同十四年伊達政宗と陸奥守より修せ

らうと名上使とむりて奥列り

とむじき上と名乃自法宣を

同十九年大坂陣の修をまつとむ

翌年乃法陣よりともうと修を

そむら

右酒院殿とつとくまら

元和元年二月十日百錢の價法制乃

倭より法わく仙波七郎丸忠吉種と

おたりく束納りり此ら

寛永三年二條より 仍奉此とま

大番北總次九人鳳輦北供を志次

その随一ふりそあち

將軍家より法之とくまら

同十年十一年蒲原清殿の法作り

奉行と仰付られ法とくまら

られ黄金時服とたまふ

同十二年同東國殿巡檢北沙法仍

法等これ黄金時服と仰付と

寛永十三年京教二條の番とつとむ

少き九月十日より死と六十歳法名

道的 后号一廓 院号深徳

系

右馬助

子世

憲務

三九束人村

早世

富重

三十郎

系

十郎

子世

富勝

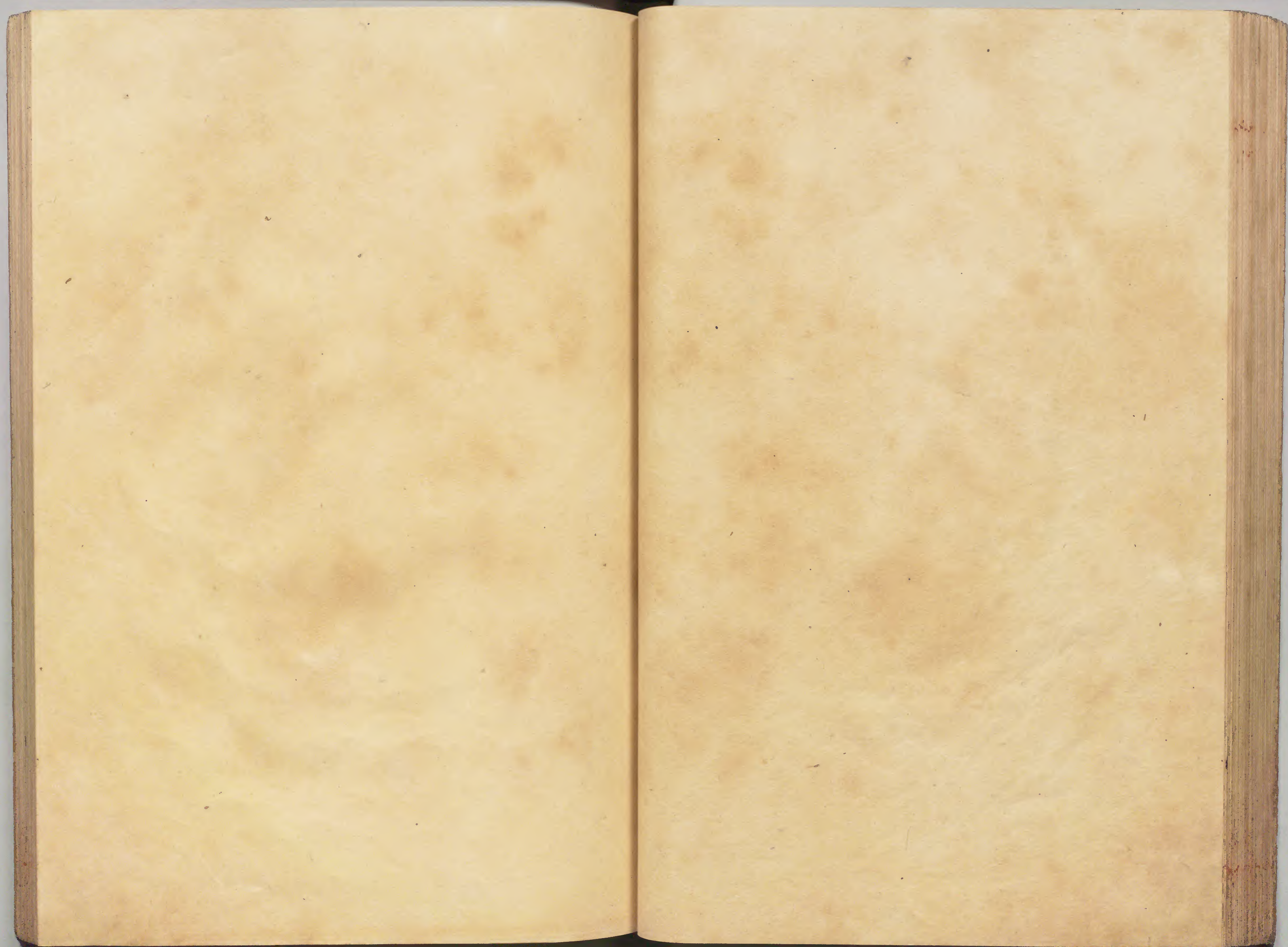
内務助

系

七郎

早世

家紋竹の丸小舞雀



物比宗

家傳りいも良門三代境中納之
兼備後河の國司となり在國の時
子とまうけ政治の良物比宗はよ
やいめをくそれ子後り物比宗を
領して氏とん子孫世々安り
石傳と

● 後永 こうなが

丹波守 たんぱのり 中國後河 ちゅうごくこうが

元長 げんちやう

丹波守 中國河内 法名 祖心 そしん
今川氏親 いまがわうぢかち ちびり 義元 ぎげん よつふ

信置 のぶぢ

後河守 こうがのり 小名友三郎 せなともさぶらう ぼん 三郎 さんらう 三郎 さんらう

あゝと云 又云 忠大 ちゅうだい 号 ごう 忠 ちゅう 中 ちゅう 國 こく 河 が 守 のり
今川 いまがわ 義元 ぎげん ちびり 小 せう 氏 ぢ 志 し 郎 らう

了 りやう

天文十七年 てんぶんしちねん 義元 ぎげん 織田 おだ 弾正 だんしょう 忠信 ちゅうしん 秀 ひで

冬 ふゆ 列 りゅう 小 せう 豆 まめ 坂 さか 郎 らう 志 し 比 ひ 合 あ 我 わ 比 ひ 志 し 郎 らう

信 のぶ 五 ご 少 せう 年 ねん ち ち 比 ひ 郎 らう 敵 てき 陣 ぢん 郎 らう

言 こと を を す す め め 今 いま 川 がわ 守 のり 志 し 比 ひ 郎 らう 志 し 比 ひ 郎 らう

我 わが 切 きり と と 志 し 比 ひ 郎 らう 志 し 比 ひ 郎 らう 事 こと を を 度 ど ち ち り り け け 死 し に

義元感状とさづ

永祿六年を引引るに飯田合戦の

少くも敵兵装さく信忠只一勝

敵陣より入大りこれをやち

小山六郎と称を討捕うにさひく

氏其感状とさづ

ある所共草を不通りありゆれ

事あり信忠か同心をびり歸衆

相うしく勝利をぬりこれと

氏其又禮文とさづ

同去年氏其没落の故氏田晴信小

治之後河國志太郡富士郡菴原郡

安部郡の角をびりを引甲列

此うち教箇取と飲トて後引持船乃

城より行とびと記晴信血判の折事

とさづこれ疎略あるより此自ら

甲四十二年晴信信の字とゆるさ

りわく信忠と号す

天正十年織田信長大軍ををり
甲列をせしむるに勝頼が骨肉の臣
信長より命を賜はれわが
とほりく降と時り勝頼が軍利
をうりたふときくあよとひく

東照大権現の初め酒井左衛門尉石川
伯耆守よりひり酒目付酒井氏家
持取乃城とわが
是小をくそのち甲列小をひき

勝頼より命を賜はれわが
をひく又勝頼をくは自身を
くはれもち命を賜はれわが
信長乃ち小自身を賜はれわが
法石雲石

宗利

たを 生國同あ
母を飯尾を命守の女

天正六年石川伯耆守教正後河國
山内一を敵一を自らをい
相つては勝りたりとふと宗利
少なききくひく切なり

同十年父信重死に後

東照大権現後列よ入河の時きめ

おられくつくとつとれ信重
とやと持私の機をもちゆよ今赤七
げ 佐をかろ

同十二年長久手合戦の時

大権現より志すくひきくつと敵と相
組くあれと討宗利りまゝに敵と相
同十八年小田原陣のちき供を
つとむ

慶長五年美原陣より志すくひきく
大坂五度の決凍りも供をとつとむ

大権現豊洲の時

右徳院殿よりつとむ

寛永元年 作をかうりく
將軍家よりつゝくまらる

良明

幼名末の村 生國武飛

母を墨部二郎右末の村が女

慶長十年めさくわく

大指現より錫あろ一あろくあろりあろ海

大坂友度の清原より供いままと

元和二年

右徳院殿よりつゝくまらる

寛永元年 作をかうりく

將軍家よりつゝくまらる

同二年 食禄をくまらる

同三年三月十一日 作をかうりて

小十人の廻頭とれり食禄をくまらる

き海より来地を領す

同五年十二月晦日布衣を賜はる

事とゆるらる

同十年十二月廿七日 紙地とくろなす

同十一年五月二十日 紙よらわて清事

院島^{えんじま}の紙^しの形^{かたち}

家紋^{かもん}左巴^{さへ}

幕^{まくら}紋^{もん}黒^{くろ}白^{しろ}青^{あお}紙^しの^の紋^{もん}

● 泰友

瓦東進

成田右典殿

永禄七年九月
仲列河
中鴻合
我此

水うき討死

朝比奈

堤中納言兼輔の
辰瀧なりと云

泰重 ヤシキ

三良右衛門尉

穴山梅吉あなやま うめきちが所ところあり

天正三年六月廿一日参列長藤合戦

此こゝより我死わがし

正時 まさとき

九右衛門尉

東照大権現とうしょう たいこんげん涉せつ知ち少せうりて後あと列り之の末すえり

まはりて参列之たぐりつりて参列

りて参列之たぐりつりて参列

永禄三年尾列おひり楠かき根ね合あ戦せん此こゝと記

涉せつ知ち少せうりて参列

天正三年参列之方あた忽たち小こ佐さ守まも

天正三年長藤合戦りあが佐さ守まも守まも

此こゝより我死わがしと云々い小こ七月十九日

涉せつ知ち少せうりて参列

同十年織田信長討伐に参陣し、
少時長坂十石を討つ。甲列
柄杓小倉あり。これとき

大指現同必市川之陣をとりしとき

これ長河部長兵衛成敗長兵衛とき

ぬれ幕下小湯一きりしとき

後列奥津市山郷ときいし三十五歳

此食邑をとりし

慶長十八年二月二十七日

正重

源六

天正三年二月二十日遠列

うまる

同十年又正時とたあ

大権現ときふんたて

同十年十二月

名徳院殿より此とき

同十八年小田原陣に修平一相列中
郡ももつと三百石此領地とすまふ

同年十月

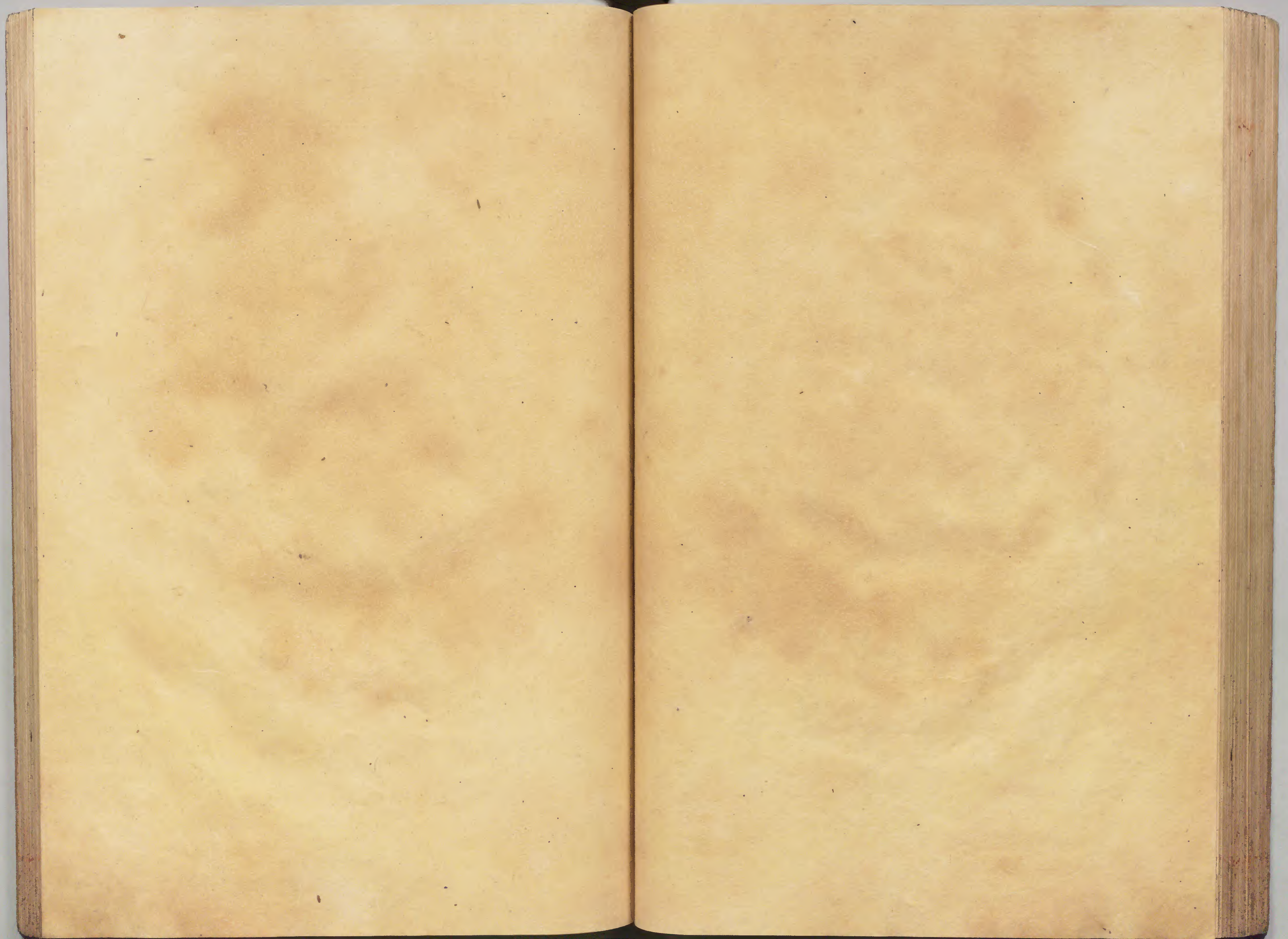
白旗院殿の涉入海小旗守とす江列
ももつと百石の領地とくまふ

慶長六年志田涉陣此中江涉使
者二十人乃貞とそふりて親と指
石川八石為射多次とたすどく先子の
取くとつていーたごまつる時り年

二十六

同六年四百石の地とくまふ海り
そつちもつと三百石此加倍と許領と
將軍家此旨命小りりて涉若法奉
外とつちもつと千石の領地とくま
ふ

幕級 善白取深横院
家級也



朝比奈

● 某

三良右衛門
今川義元小つて天正六年後列
遠目とをひく我死

某

九条東

東照大権現沙印少行さうごうと後列ごりゅうり
たつりまはとまま色いろ表あはとなくし勒し仕し一
さくまるるれれふふららくく冬ふゆ列りゅうり
還えん濟さいののままききままひひくくままるる
永えい祿りく三さん年ねん尾び列りゅう桶かづ換かるる合あ戦せん此こゝままき
修しゆ身みとと法はふとと心しん

大権現大高おほい此城このしろ小入せうに法はふののとと此こゝままきき
あひひくくままるる

台たい續ぞく

久世東

台たい遮しや院いん殿でん

將軍家せんぐんけりりつつふふくくままるる

寛永十八年十月十九日死し年ねん六む十三じゅうさん

右豊

久九

廿國

寛永十二年

將軍家小つ人

家紋之頭左巴

果

朝比奈

河内守

生國後河

今川義元いまがわのよしたけつと義元よしたけ氏田信玄うぢののぶのぶ

蒲原ふしはらよりをひく合戦あはせのとき蒲原ふしはら

の城しろ近ちか手てさきよりしるり城やしろを合あひ

れゆゆより義元よしたけ感書かんしょとさげくころ

後信玄のちのちおつふ
甲列まがら没落まぼろ此こ没落まぼろされ

東照大権現とうしょうだいこんげんより法ほう入いりて

文祿三年ぶんりくさんねん七十七しちじゅうしち年ねん行いく

法名ほふな宗伯そうはく

真直まぢき

義右衛門尉ぎえいもんゑい 生田なうた同前どうぜん

今川氏いまがわうぢ真直まぢきよりより久ひさ保たもち信玄のぶのより

了りょう

永祿十二年えいりよくじふにねん信玄のぶのを列り越こえ川がわの城しろを

其その時ときに真直まぢきよりより大浦おほのうら松まつを

新地あらち龜松かめまつよりより錢ぜにををあはれ

と義直ぎぢき一ひと番ばん錢ぜにあり

を列り池田いけだ北きた邊へよりよりと

大権現だいこんげん信玄のぶのと合あ戦いくさ此こゝ義直ぎぢき孫まごと

敵たてと戦いくさるる義直ぎぢきこれこれををひひくくははきき小

正ただしくしく相あひつつふふ取とりり孫まごとと義直ぎぢき敵たて

矢りありわく美並成をかうる

五正六年後河國を討ふといひく

大権現信玄と合戦のとき美並甲列

勝のうらよありと敵と松平石川

山田平市ありといひてい

こゝろしるこゝろよといひく平市と女をま

トゆ松平を彼書再よ志し書これと志れり

同十年甲列没落北條あり

大権現より流るるまゝ

同十二年長久手合戦のとき佐藤

と青級とぬり

慶長五年 嚴命とけしぬり

右徳院殿より居たりとあり美田陣と

佐藤と

大坂友成北條陣ふも志こひ

まつるそのち

お軍家小つとく

元和七年七十歳に

真正まこと

貞治六年 出陣回所

貞治六年

大指現よりつてくまの関原陣より

修平氏

同十九年 元和元年 大坂津陣より

修平氏

元和二年

右徳院殿より流るるくまの関原

同九年

右軍家よりつてくまの関原

真正まこと

貞治六年 生田茂院

大坂津陣北より

右徳院殿より流るるくまの関原

元和二年 修平氏 後河忠氏

小属と忠也歸費——と此ら中多

因情守之致らる

寛永十三年めさ進とく

將軍家より流之たぐまらる

真之

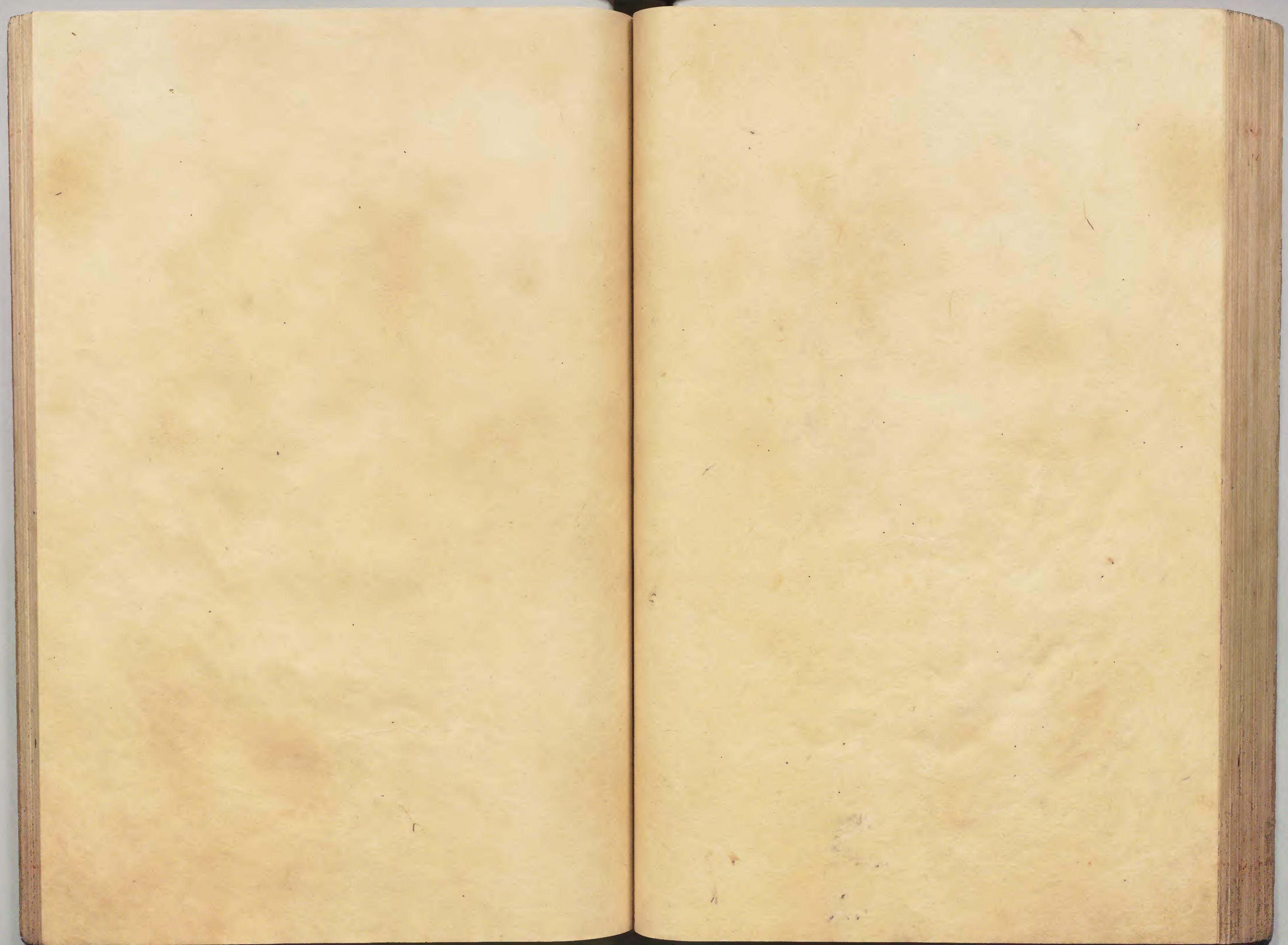
十三年 生國武彦

寛永七年

將軍家小つとくくつ家

幕北紋取深

旗北紋三取在也



● 集

朋比奈

丹波

生本甲斐

今川氏 憑と 比義元氏 真一

つふ

来

友九郎

返籍前の号は

生國は後河

東照大権現よりつくつくつくつく

務改

助大夫 生國は同前

大権現

右徳院殿よりつくつくつくつく

寛永六年十二月に死し八十一歳
法名は一八

信務の

小十郎 生國は同前

寛永六年四月に死し

務之の

初は良

生國は相模

右 遜院殿

將軍家小法久（是く）月（つ）日（ひ）

寛永十七年三十八歳（行）て死（し）す

法名 廓傳（くわくでん）

勝行（かつぎょう）

傳九郎 生國氏（ひこくに）

寛永九年九月

將軍家（つ）久（く）た（た）て（ま）る（る）

勝時（かつとき）

權十良 生國氏（ひこくに）

寛永十七年

將軍家（つ）久（く）命（の）小（こ）久（く）と（と）く（く）父（ちち）勝（かつ）之（の）が

志（し）認（にん）と（と）す

信久（のぶひさ）

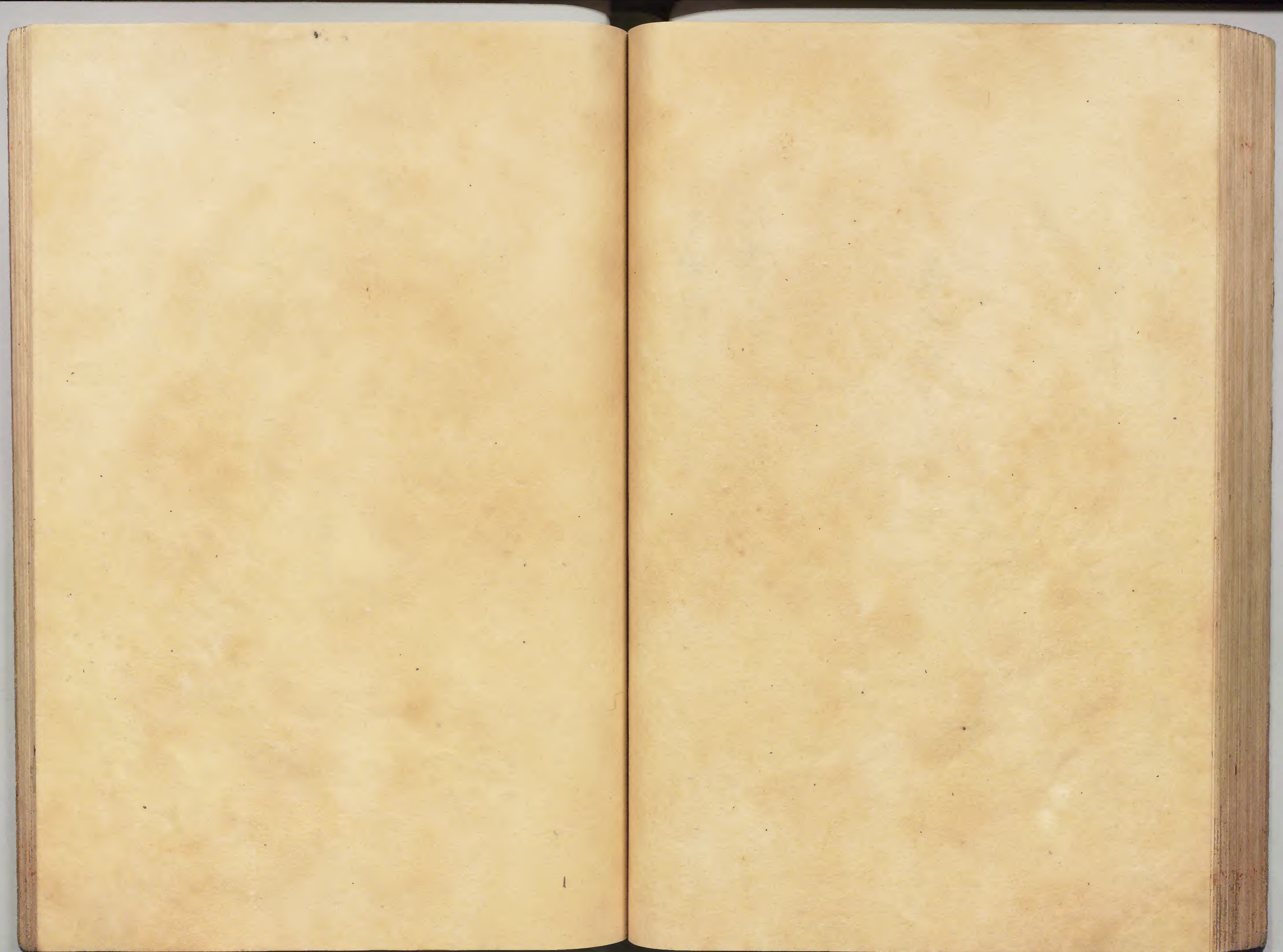
孫長政 生國氏（ひこくに）

信勝^{ふし}忠^{ちゆう}子^こ如^に所^{しよ}官^{くわん}氏^し酒井^{さかゐ}
左衛門尉政辰^{さゑもんゑいせいぢん}が息男^{そくなん}信十^{ふしじゆ}が子^こ也^{なり}
大権現^{おほゑん}信十^{ふしじゆ}を^をし^し一^{いつ}と^と流^{なが}小姓^{こせう}と^と
い^いふ^ふは^は信^{のぶ}命^{のち}あり^{あり}と^と紀^{のり}伊^い大^{おほ}納^{のり}之^の
於^お宣^{のたま}今^{いま}又^{また}命^{のち}を^を流^{なが}と^と小^こ浪^{なみ}介^け
越^こ後^ご少^す右^{みぎ}忠^{ちゆう}輝^{てる}之^の小^こつ^つ人^{ひと}を^を流^{なが}と^と
浪^{なみ}人^{ひと}と^と新^{あらた}り^り寛^{かん}永^{えい}三^{さん}年^{ねん}之^の十^{じゆ}日^{にち}某^{なり}
に^に一^{いつ}と^と死^しと^と
信^{のぶ}久^{ひさ}信^{のぶ}務^むが^が家^け督^{とく}を^をつ^つと^と

右徳院殿

右軍家^{みぎぐんけ}より^{より}信^{のぶ}久^{ひさ}と^と流^{なが}と^とつ^つる

家の^け紋^{もん}三^{さん}匹^{びつ}五^ご巴^へ



朝比奈

昌是

友右衛門 甘國後河

武田信玄同勝頼小治

天正三年冬列長篠よりとひく

二十一年行て戦死

昌親 まさちか

新九良 生國甲斐

信玄勝頼より法ふ

天正十年甲列入法此より定められて

東照大権現まつくまうり領地を

こまふ湯朱平あり

同十二年尾列七久子戰場より佐

左にて首級をゆりし

同十八年相列小田原陣盤子奥列

陣小佐多し

文祿元年肥列名護屋陣より

佐多しその

白徳院殿より法ふ

慶長六年信列高田陣の佐多しを

法ふ

同七年十月十六日十三歳より

あり法名長受

昌行

六九歳 出國後河

慶長七年

右衛門殿小つゝ

同十九年元和元年大坂御陣小

佐手一任給侍中身正次が継

一て首級を治

元和二年 歳命よりわく後河

大納之忠也小属也

寛永十一年めされて

右軍家つゝ

昌澄

八九歳 出國後河

慶長十二年

右衛門殿小つゝ

同十九年大坂御陣北より江戸為

乃御番をつとむ

元和元年大坂陣おさかの陣さに高木たかぎの忠ちゆうが
総小隊そうせうたいとして侍さむらいする
同九年
將軍家よりつとむる

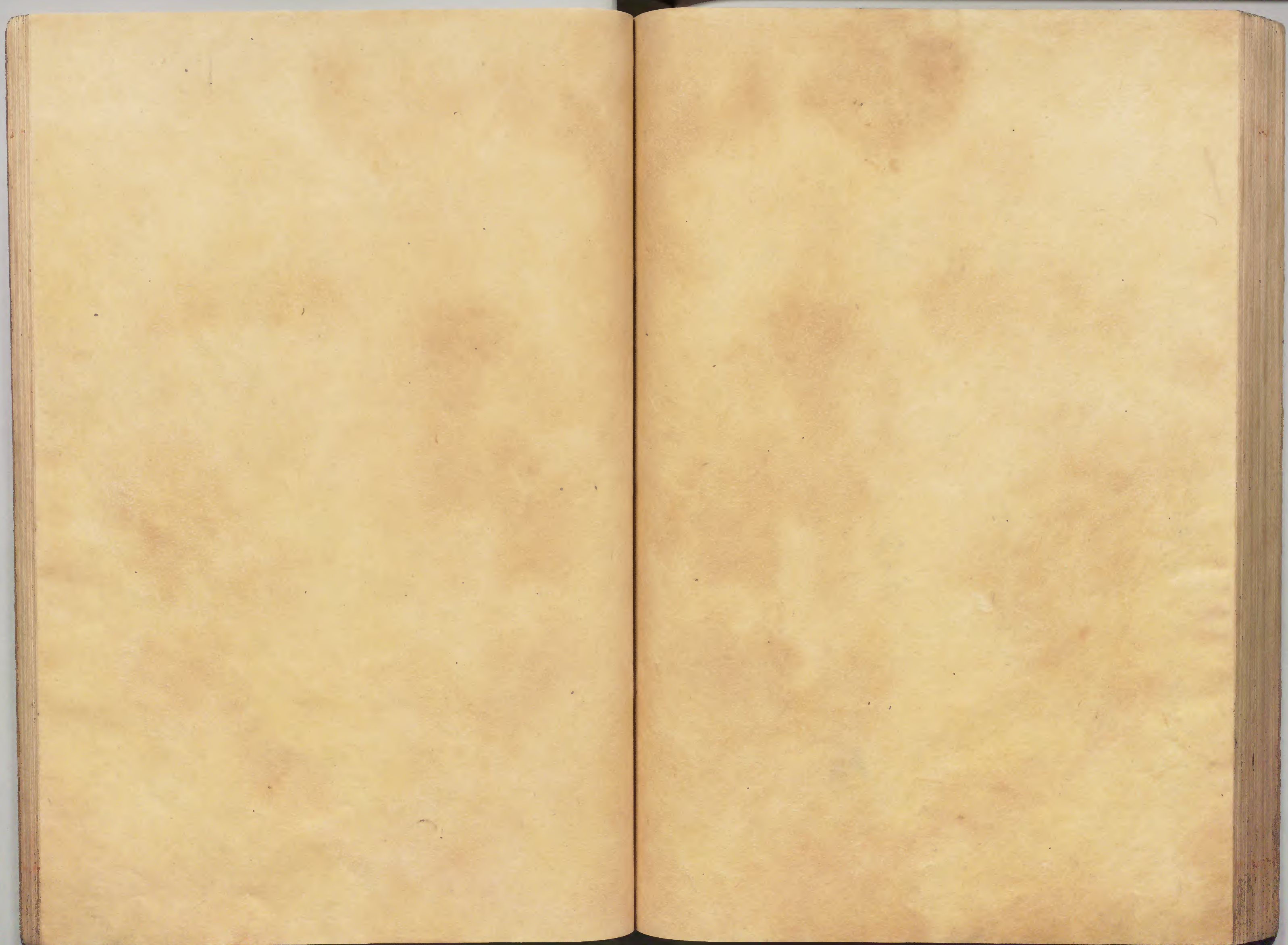
昌春まさはる

太良兵衛 生小次郎
元和二年
白旗院殿小次郎とす

昌次まさつぐ

寛永元年より
將軍家小つとむる侍
新九郎 甘國武藏
寛永十四年
將軍家よりつとむる

家紋 丸巴いかり



物比奈 あきいひ

● 正名 ただな

新八郎 牛國後河 しんぱちろう うしくにのかわ

小條美濃守 こじょうみのり 小つて使番 こつてしばん とする

後姪物丸 ごまゝものまる

東照大権現 とうしょうだいこんげん 之流久 のりく たく たく 戸川 とがわ 於 お

うわく正名 ただな も も 後河 ごかわ あり あり

大指現小勅仕——たぐりて家

慶長十七年十月八日死に 法名

廣心

正重

新女良 恆小内記と号す 生年未詳

正者貴て子やとて之を物比祭物祭り

子や中

右瀧院敷小つうへたぐりて大番を

法と心

寛永六年二月十四日死に年三十三

法名宗忠

正照

内祀 生國同前

寛永十七年二月大番とつと心

家紋 丸巴



朝比奈あそひな

● 泰重やちう

玄二郎

生田遠江なまはたのえ

今川義元いまがわのよしたか
つと

泰勝やちう

源右衛門

生田後河なまはたのちのかわ

今川氏真いまがわしげつふふあり

東照大権現とうしょうだいこんげん後河津ごがわづ入國いりくに此時このときありて

流ながる

天正十二年てんしゅうじふにねん尾列おひり長久手ながくで合戦あはせあり

首級しゅけいを得えあり

資重しげしげ

赤丸あかまる討うつ

文祿二年ぶんろくにねん十二月じふにがつ十六日じふろくにちあり

大権現だいこんげんより赤丸あかまる討うつ

慶長六年けいちょうろくにねん九月くわがつ岡原陣おんげんじんより侍さむらいあり

は

同十九年どうじゅうくにねん元和元年げんわのちしゅうねん大坂おさかあり

陣じんより侍さむらいあり

白徳院しろとくゐん敵たかふつふあり

同六年どうろくにねん後河津ごがわづ赤丸あかまる討うつ

同八年どうはちねん

將軍家しやうぐんけより侍さむらいあり

決む

資務イフ

加云来 出國シヨク茂茂シヨク

寛永十三年

將軍家シヨク了シヨク洋シヨク竭シヨク一シヨク一シヨク一シヨク

同年十二月大涉シヨク番シヨクとつシヨクむ

家紋シヨク也シヨク

● 定則

射馬 中國後河 法名道久
今川氏共りつ子

夫部

家傳りいさく 堤中納之兼補之辰高
ちりあしと云

定清

掃部 世國同前

天正十八年

東照大権現

氏列徳持村

文禄元年

徳院殿

慶長元年

同六年

く

あ

同十年

り

り

り

り

り

同十九年元和元年大坂友度元清
陣小佐守を法とむ

元和十八年元和元年清と海軍に

清と海軍の佐守をつとめく息事

あ

元和八年六月元和元年小佐守元清と元和十八年

法名目免

定務

七九巻

元和元年

慶長十七年

右徳院殿よりつとめたる御家

同年清と海軍の佐守を法とめ食禄と

法とむ

大坂友度乃清陣より佐守をつとむ

元和八年元和元年清と海軍を法とめ

且同元和十二年をあらわく父が役を

法とむ

寛永二年来地の法米平をあら
きめさせしむるに幕下此士大足り
ふまふと記定務りきこられん載せ
同九年

古徳院倣費法乃倣

將軍家一一人をてりしる

凡受七十七年より寛永十一年り
しりく 沙と海なるび小日光法社
泰あひるを 沙曾將の佐舟をつとむ

定成

物進 生國同あ

受七十九年

將軍家小つ一人をてりしるを侍の列に

くもる

元和元年粮米を海る

同三年食禄をくもる

同四年沙細之改り此同んぬ

とあつる

同九年、清上流の住家をつとむ
寛永三年、清入流の住家をつとむ
同五年、食禄をつとむ
同十一年、清入流の住家をつとむ
外日光、社倉毎度住家をつとむ

定定

自敵

定定やーなひく子とて定は大臣

次良共衆連利が子なり

寛永十七年

將軍家よりつとむる家

定守

格之趣

定房

四良共衆 生國後河

定房やーなひく子とて定は仁科

清之良宗安が子なりく定清の外孫なり
寛永十七年うま

將軍家小つてくつてくつて

同十九年父定清とわたりて没す
はとむ

家の級た巴

● 祐則すけのり

跡の口ま越ま前ま

大郎おほらう

此と左跡の口ま号まと利り志しり
以もて里りととああととああとと大郎おほらうと
祐すけと

吉利

武家 上國武家
小幡氏政よりつふ

利忠

九郎玄来 上國同家
いづれ小幡氏とてつふ
天正十八年小幡原没落乃ち

東照大権現より瑞

いづれ武家といふ
号と

慶長十年十一月十一日

法名通直

忠政

藤九郎 武列江戸より
利忠やいづれ子とてつふ

四出束村重吉が次男なり

実父重吉

この四出束村とありしは

生國

相控 氏重より流ふ

天正十九年

大権現より湯——とくし流る

慶長十六年十月二十七日小死

年四十九 法名宗吟

重吉の父左束門村重次

を山丹波守重景が
井なり重吉が子孫

乃事々を山氏か
系図より見えたり 右氏康小つふ

永禄十二年 氏康が七男小條三郎重虎

上叔孫正少卿輝虎が長子と稱ふと云

重次ありしとてひく致なりといふ

重吉と云ふは此名を母波とありし也

と輝虎が妹と娶

天正六年三月十三日輝虎被刺す

りしなりとて重吉が次男重虎と

家督とありしなりとてありしなり

ふ系虎流りしなりとてありしなり

國府城こふのじやうより志望しぼうせきと紀伊次郎きいじやう
が余ありより敵軍てきぐんをやぶりて女メ城じやう
より京虎きやうこが妻さい子こをころし城じやう中ちゆう小せう
火ひをくわしくわくく自殺じそくす法名ほふな淨蓮じやうれん

赤坂丸餅あかさかまるもち

幸山さいざんが赤坂丸餅あかさかまるもち内うち小二せうじ

法ほふ名な淨じやう蓮れん字じ

● 勝時

中山

家傳にいゝ高友十代中山
中納之殿此後裔なり

氏初大輔 尾列柳初の序よむ海

有母右束の大夫忠正が婿となれ

織田信長より子 法名宗也

勝政

徳右衛門 生國同前

母多野右衛門大友忠正むねただの娘

織田信雄より流る

天正十八年

東照大権現之御錫也

安長九年

右徳院殿之つとく〜

大沙耆とつとく

同十八年十九年〜病死

法名浄名

勝尚

六年次 生國同前

信雄より〜

天正十八年〜

大権現之流る〜上総國

とひく六百石此領地とてさす
白徳院殿につくす
北徳院とす

安永七年四月四日四十九歳にて
死す 法名道荷

勝儀

六年次 生母同前

安永七年

白徳院殿より法入す
領地とす
安永九年

將軍家よりつくす

徳光

安永九年 生國同前

水野也とす
天正十二年尾列長久手合戦の地

首級を得たり後ち方劫をぬく事
同十八年相列小田原陣の討敵陣
より取らるあり忠光これと記し
ありわつとありて首級を得たり
其後秀吉これと賞し一時服毒に
合後をさす

同年めされ

大権現より津場

同十九年六百石此領地を津場

受長六年濃列岡原陣小供を以
同六年二百石此領地をくはる
りし振く七百石を領知し大治
をつとむ

同年二十六歳に病死

重時

徳右衛門 生國同前

大権現

台徳院殿に三月三日に御つり文政勝が
領地を賜ふ

元和九年

將軍家につゞくは御家

寛永十六年六十歳に御つり死す

法名道寛

道時

徳太承門 廿二回同家

寛永十一年

將軍家に法に御つり文政時が

領地を賜ふ

改長

十郎太承門 尾列清次に御つり

慶長十八年

台徳院殿に三月三日に御つり

同十九年大坂御陣に御つり

翌年再陣此より後尾列伏見

清書をわしめく公波山城守が継
嗣一江戸之作一くる為之此書と
決む

元和九年

將軍家りつてくくくく大清書
をつとむ

寛永八年小書請の役をつとむ

忠
意

六段右殿つ 中書式院

寛永十六年

名徳院殿につくたくくく

同年清切米とき満りる大坂あ

度此御陣の佐をつとむ

寛永九年

將軍家りつてくくく

同十年領地とくくく満りる

大清書をつとむ

豊久

六大夫 生國同好

寛永十二年

將軍家につく

同十六年沙切米と評紙一太沙
番をつとむ

忠勝

茂左衛門 武蔵江戸小じま

慶長十八年

大権現につく

継七百石乃地を評紙と

その反大坂を評紙と

元和元年

名徳院殿よりつく

同九年より

將軍家につくしきまのる

寛永十年領地加倍二百石となす

旧領もふ九百石を領す

勝久ひさ

指丸さき丸 生國なまくに 同前

寛永十四年

將軍家之侍之きくまのり

同十七年沙切米をふまりり大

沙さ 番ばん とつとむ

家いへ 紋もん 三さん 文字もんじ 松皮まつかわ

